II類：14世紀後半～15世紀初頭頃

造形が簡略化し厚みの無くなるもの。脇方谷内出中世墓の第４段階（15世紀前半）や藪田薬師中世墓にみられることから15世紀代に下る可能性もあるが、掲載資料は像容がまだ比較的はっきりとしており古相を示すと考えられるため、一応この時期に推定しておく。

⑦　一石五輪塔

I類：15世紀

水輪が丸く、地輪が方形または長方形の幅広のもの。全体的に彫りが深い。

II類：16世紀

水輪が角張り、地輪が縦長のもの。全体的に柱状に近く彫りが浅い。一石五輪塔は16世紀代のものが多くみられるが、脇方谷内出中世墓の第４段階（15世紀前半）には既に存在している。I・II類に時期差を求めるとすれば、加工の簡略化が進んだII類が新しい様相を示すと考えられるため、時期を大まかに推定してみた。

３　中世の放生津について

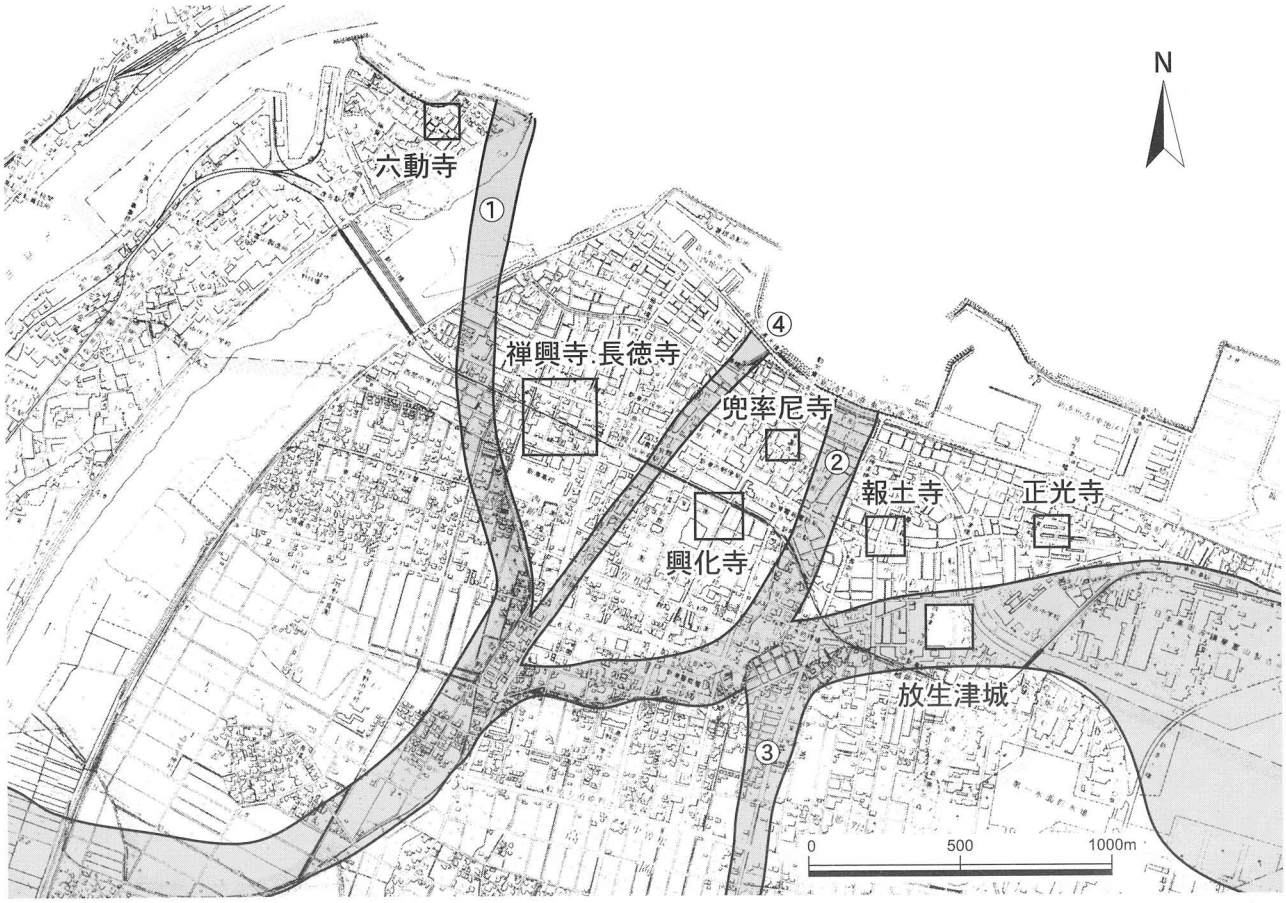
次に分布調査結果をもとに中世の放生津について考え、今年度調査のまとめとしたい。

中世の放生津については、青木一彦他の考古史料を中心とした詳細な研究がある。この研究は遺跡や石造物の分布から中世放生津の地形・寺院の所在地を推定した点で特筆すべき成果が得られ、多くの情報を与えてくれる（青木他1998）。以下の考察も基本的にはこれに準ずるものであり、記述に重複する部分も多いと思われるが、分布調査の結果得られた新たな知見や、旧地籍図から読みとれる情報もふまえて中世放生津の様相を考えてみたい。

まず、調査結果概要の項でもふれた中世放生津の地形について概観してみる。中世以前に庄川の本流が放生津に向かって流れていてことは『表層地質図富山』など地質の方からも確認されている。その流れは、庄川が現在の伏木台地手前で小矢部川から分流し東方に流れを変え、上牧野と宮袋の間を通り、中曾根と善光寺の境界付近で北・東方向に分流し、一方は六渡寺へ（第５図①）、もう一方は東へ向かい四日曽根の東側を通って奈呉町付近で海に達する（第５図②）。この旧河川の痕跡は、現在でも水田の区画や新湊・高岡両市の境界線として残り、明治初期の地引絵図（図版12）にもそれが表れている。河川跡地には川原・石名田・野開・高野田などの河川や湿地帯に関する地名がみられ、その周囲には烏帽子形・高段・金屋畑などの地名があり、畑地として利用されていることから、これらの場所が河川によって形成された自然堤防であることがわかる。四日曽根の東側を通る流路は、小字高野田・湯の詰付近で当時もっと川幅が広かったとされる神楽川（第５図③）と合流してそのまま放生津や荒屋まで達し、ここで放生津潟に注いでいたことが水田の区割りや芦原・舟入・大深などの地名から伺える。また①・②の分流地点付近から現在の湊口に向かう流路（第５図④、田町川の前身か）の存在も指摘されており、蜜柑田遺跡の試掘調査結果がこれを裏付けている。これらの河川がいつ頃まで流れていたかは諸説があるが、出現時期については、河川の自然堤防上に縄文時代の遺跡が存在し、また河川が日本海に注ぐ地

名　称	所　在　時　期	備　　考
禅興寺	13世紀後半～14世紀後半	禅興寺・長徳寺廃寺跡、南北朝時代に焼失。
石塔院	？～14世紀後半	禅興寺・長徳寺廃寺跡、禅興寺山内に所在。正平十九年に飛騨の僧乗船が写経を行う。
長徳寺	14世紀前半～15世紀末	元大慈院、禅興寺の山内に西隣する尼寺。
報土寺	13世紀末～15世紀末	報土寺廃寺跡、久々湊所在両説あり。
興化寺	14世紀前半～15世紀末	興化廃寺跡・大石川遺跡、天正大地震の際に伽藍の全てが庄川河床に沈んだという。
兜率尼寺	14世紀前半～15世紀末	一本杉Ｂ遺跡～万福寺遺跡周辺？、興化寺の北側地続きに所在したとされる同寺の尼寺。興化寺とともに廃絶か。
大光	不明	来光寺塚？興化寺山内の施設か。
能建寺普照院	15世紀末頃？	荒屋地内？延徳三年細川政元・冷泉為広が越後下向の往路に宿泊。
興福寺	15世紀末頃？	荒屋地内？延徳三年細川政元・冷泉為広が越後下向の復路に宿泊。
正光寺	15世紀末頃？	荒屋～神保寺付近？明応三年、足利義材が仮御座所として使用。
六動寺	不明	六渡寺遺跡、『越中志徴』に記載あり。『源平盛衰記』では「六動寺の国府」。

第１表　中世放生津所在寺院



第５図　中世放生津と寺院等所在推定地（1／25,000）（青木一彦他　1998より加筆・修正）

点に海谷が発達していることから、少なくとも弥生時代以前の古い時期まで遡ると考えられる。

中世放生津にこれらの大河川が流れ込んでいたということは、町並の範囲や、寺院の所在地などが自ずと限られてくることになる。これに石造物の所在地を加えてみると、大きく分けて西新湊、三日曽根、立町、荒屋の４か所にまとまる傾向があり、それぞれのまとまりには禅興寺・長徳寺、興化寺、報土寺、正光寺の所在地が推定されている（第５図）。禅興寺・長徳寺は①・④の流路間に位置する。興化寺は②・③の合流地点に位置し、文献には北側地続きに兜率尼寺の所在が確認できる。他にも大光と呼ばれる施設が存在していたとされるため、大石川遺跡や来光寺塚、専念寺付近の石造物もこの寺院との関連を想定することができる。正光寺・報土寺の所在地については不明な点が多いが、正光寺は足利義材が放生津に逃れた際に仮御座所としていたことから、神保氏の拠点である放生津城の近くに、報土寺は時宗が武家と密接な関わりを持っていたことや東放生津に所在していたという記述から、②・③より東側の守護所付近の報土寺廃寺跡や、『専念寺由来書上』にある旧法土寺村付近と推定できる。

以上のように寺院の所在推定地や石造物の分布・出土場所から、ほとんどの石造物が現位置を保っていないとはいえ、ごく限られた範囲内での移動と考えることができる。また寺院等の所在推定地が河川付近に位置することは、明らかに水運の利便性や水濠としての防御性を重要視する意識の表れであろう。舟による水運が交通・物資運搬の重要な役割を担っていたことは、明治時代の地籍図に見られる河川や水路が現在の主要交通路と重複していることからもわかる。万福寺遺跡・蜜柑田遺跡・一本杉Ｂ遺跡は④の流路に沿って所在する遺跡であり、港町周辺の石造物や市指定文化財越前大甕も河川からの出土である。特に寺院ついては石造物や、その他の必要物資もかなりの量であったはずであり、水運によってこれらを運んでいたとは想像に難くない。興化寺が天正大地震の際に庄川河床に埋もれたという記述は、寺院が大河川の合流地点付近という洪水の被害を受けやすい場所に所在していたことを示しているが、これも水運の便を考慮しての選地と考えられる。このことから寺院のみならず放生津の人々にとっても河川を利用した水運が生活に密接に関係した重要なものであったことが伺え、河川からの出土遺物を運搬の途中、何らかの原因で河川に落下したものとすることも不自然なことではない。中世の放生津は放生津潟や河川を利用した水上交通・運搬によって支えられていたのである。

４　小　結

今年度の調査対象地区は鎌倉・室町時代に越中の政治・経済の中心地として栄えた放生津の町にあたる。当地区は既に市街地化が進み、踏査が可能な範囲が極端に少ないなど地形条件に恵まれず、結果的に僅かながらも遺物が採集できた場所は社寺の境内地のみという状況であった。ただ昭和63年～平成３年にかけて行われた放生津城の試掘調査から、中世期の放生津は地下１ｍ以上の現在の海面下に没していることが考えられるため、現在地表からの観察は不可能に近いとはいえ、逆に考えれば地下深くに往時の遺構が良好に残されている可能性も十分にある。歴史的環境から見ても市街地の大部分が中世以来の放生津の歴史を受け継いで発展してきたことは明らかであり、今後は市街地においての調査の進展や遺跡範囲の把握、調査方法などの検討が必要となる。